恋哀～　ren-ai　～物語

城市佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋哀～　ｒｅｎ－ａｉ　～物語

【Ｎコード】
Ｎ５４２４Ｄ

【作者名】
城市佳

【あらすじ】
今もどこかで誰かが、恋哀してる・・切ないけど優しい時間が流れている・・そんな瞬間を切り取った、短編集です。

真夜中のｈｉｇｈｗａｙ（前書き）

少しオトナな表現があります。
ブンガクの範疇だと思っていますが、
嫌な方はスルーしてくださいね。

真夜中のｈｉｇｈｗａｙ

ずいぶんと長く生きてきた気がする。
この年になるまでずっと、
出会いと別れはペアになっているんだと
思ってきた。
でもたとえ別れが訪れる事が必然だとしても、
たくさんの男と出会って過ごした日々は、
ちょっとした勲章だとさえ、
思っている。
好きモンだとか、尻軽だとか、
言いたい奴は言えばいい。
あたしはいつでも、真剣に愛してきた。
たとえ3日の恋にだって、
命かけてきた自信がある。

翔平と出会った時もやっぱり、
あたしは男と別れたばかりだった。
何年も売れないミュージシャンやってる、
夢の話しかできない男だった。
夢でお腹はいっぱいにならないから、
あたしが稼いで貢いだ。
洗濯をして掃除をして、
あったかい食事を用意して、
帰ってくるかどうかも分からないのに、
毎日待っているあたしのことが、
いつしか鬱陶しくなったらしい。
見返りを要求したことなんか一度もないのに、
あたしはいつもこうやって重たがられる。

仕事から帰ったら、アパートはもぬけの殻で、
あたしが持ち込んだ電化製品まで、
キレイさっぱりなくなっていた。
何もない部屋であたしは、
１時間ほどワンワン泣いて、
それから、男の携帯に電話をかけた。
慌ててたのかうっかりなのか
番号はまだ変えてはいなかったようで、
留守電メッセージが流れた。
あたしは今までと同じように
「ありがと。楽しかったよ」ってだけ入れて
電話を切った。
それからあたしは
自分の携帯をその場に置いて、
アパートを出た。
メモリーを消す必要なんてない。
男の分しか、入ってなかったのだから。

翔平はその男以上に、
世の中をなめた奴だった。
どうやらあたしは、そういう男に弱いらしいのだと、
最近になってようやく気付いた。
働けないから働かないのか、
叶える気もない夢を語って、
安い酒を煽っているだけの、
どこからみてもバカな怠け者が、
大きな磁力であたしを引き付けた。

じめじめした狭いアパートの

きのこが生えそうな布団の上で
翔平に抱かれながら、
暗くて深い穴の中に
一気に吸い込まれていくような感じに包まれて、
あたしは何度も絶頂に達した。
そして本当に吸い込まれていくことに
なっちゃったんだ。

あたしたちは、ささいな欲望を満たす為に、
短絡的な行動に走り、
人を殺めてしまった。
その場をただ逃げ出すしか出来なかった。
戻るところなんてない。

盗んだ車で高速に入り、
あてもないまま飛ばし続ける。
音楽をかける余裕もなく、
降りしきる雨がフロントガラスを叩く音だけが、
ＢＧＭになっていた。
そんな状況でもあたしは、
ハンドルを握る翔平の
頼りない所在無げな横顔を見ながら、
ひとり高まっていた。

「翔平だけ、ひとりで逃げな」
夜明けのサービスエリアで
薄いのに苦いコーヒーを飲みながら、
あたしは口を開いた。
翔平はあたしを片目でちらっと見て、
髪をかきあげる。

「お前はどうすんのさ」
「あたしは・・・」
あたしは、今までと同じように
この恋にエンドマークをつけるだけのことだ。
今度はちょっと大きな
エンドマークになりそうだけどね。

ここがどこなのか気にもしなかったけど、
ほんのりと潮の香がする。
近くに港があるのか、
ボーっと、汽笛が聞こえた。

ほんまもん

初めてもらったバイト代で、
夫婦茶碗を買ってきた。
たまたま通りがかった陶器市で
安く売っていたのだ。
「今日はなんのお祝いや？」
お母ちゃんは茶碗を手にとって
しみじみと眺めてから、
いきなりぼろぼろと涙を流した。
いくらなんでも感激しすぎだろうと、
あたしはちょっと引いた。

お母ちゃんは大きな音を立てて鼻をかみ、
前掛けで涙をぬぐってから、
話し始めた。
長くなりそうな気配に、
あたしは覚悟を決めて
ケイタイの電源を切る。
途中で鳴ったりすると、
怒り出すに決まっているからだ。

時代が一気に２０年ほど遡った。
お父ちゃんとの馴れ初めなら、
何度も聞かされて覚えてしまっている。
またかと思わず耳をほじった。
「あんたももうすぐ二十歳やろ、
二十歳いうたら大人や、
そろそろええやろ」

いつもと違う口調で
お母ちゃんはそう念を押した。

「道ならぬ恋や、今でいう不倫やな」
あんまりびっくりして、
私はお茶でむせた。
「お父ちゃんは老舗の旅館のな、
婿養子やったんやで」
「婿養子？」
お母ちゃんは、大きくうなづいた。
「ほな結婚してたっていう事？」
婿養子という言葉が
ピンとこなかったので、
とんちんかんな言葉が出た。
「だから、道ならぬ恋やて、
いうたやないか」
お母ちゃんの顔が上気している。
「政略結婚、させられてたんや」
ずいぶん大袈裟な話になってきた。

証人がいないから、
真偽のほどは確かではないが、
通いで仲居をしていたお母ちゃんに、
お父ちゃんが一目ぼれしたらしい。

お金が自由にならないお父ちゃんからは、
プレゼントのひとつもなかった。
今でもヒカリモノに
興味のないお母ちゃんは、
どうでもよかったんだと思う。

そんなある日、
お母ちゃんは自分の給料で
夫婦茶碗を買った。
「たまたま陶器市で
みかけただけやったんやけどな」
あたしは笑い出しそうになるのを
ぐっと堪えた。
お母ちゃんの部屋にやってきたお父ちゃんは、
さっきのお母ちゃんと同じように、
しみじみと眺めてから涙を流し、
それから「堪忍な」と手を握ったという。
「ぬくいなあ・・このぬくもりだけは、
ほんまもんや」
まだ若かったお母ちゃんには、
「よう意味がわからへんかったわ」
というが、
ふたりで手を握り合ったまま、
いつまでも泣いていたのだという。

それからどうしてこうなったのかが、
一番聞きたいところだというのに、
お母ちゃんはもうすっかり自分の世界に浸って
ときめいている。
いつの間にかあたしが買った夫婦茶碗は
大きなハンカチに包まれていた。
お父ちゃんの病室に持っていくんだと、
お母ちゃんが目を細めた。
「きっとようなるで」
あたしもなんだかそんな気がしてきた。

「あんたも見つけや、ほんまもん」
お母ちゃんが、ファンデーションも
つけていないしみだらけの顔に
真赤な口紅を塗りながら、
にやっと笑った。

旅立つ君と、旅立てない僕と。

奥行きも高さもある大きな舞台の上、
所狭しと仕込まれた、
沢山のライトに照らされて、
小柄で地味な印象しかなかったはずの紗耶が、
ひとまわり大きくなっていた。
長い間一緒に頑張ってきた劇団を辞め、
オーディションを受けて立った舞台だ。
物語の本筋とはあまり関わりの無い
ほんの小さな役だったのに、
僕にはひどく眩しかった。

学生時代、僕は先輩に誘われるまま、
大学のサークルあがりの、
小さな劇団に参加した。
僕が入った頃には、団員も数名で、
まだまだお友達サークルのノリで、
稽古が終わった後の酒の場が、
何より楽しみだった。

そんなアマアマな雰囲気に嫌けがさした数人が
別のユニットを立ち上げ、
僕もなんとなくそっちに参加した。
肉体訓練は運動部のそれに匹敵するぐらいハードになり、
どういうツテなのか外部から演出家も
加わった。
少しずつ芝居の面白さがわかってきたような
気になっていた僕は、

そんな風に流されながら、
いつしか「芝居」が生活のすべてになっていた。
２０歳をすぎたばかりの紗耶が入ってきた頃には、
看板女優が映画デビューを果たしたり、
座付き作家が賞をとったりして、
劇団の知名度もぼちぼち上がり始め、
開演に審査が必要な大きな小屋で、
年に数回の定期公演をするようになっていた。

紗耶は大きな商業劇団の研究生だったが、
正式な団員になる選抜試験に落ちて、
それでも芝居をやる夢を捨てる事はできず、
いろいろな劇団を回っていたらしい。
基礎をがっちり勉強してきた子にありがちな、
頭でっかちな所はなく、
素直で勉強熱心だったから、
皆に可愛がられた。
でもなかなか役はつかなかった。

「おまえには華がないんだよな」
演出家がそう言いきった時、
紗耶はうつむいて悔しそうに唇を噛んだ。
身体作りや発声、芝居の細かい技術は
勉強し稽古に励めばそれなりに身につくものだ。
でも「華がない」つまりは
「存在感が希薄である」という事に関しては、
もう「才能」の領域で、
紗耶が途方に暮れるのも当たり前なのだ。

その日、僕と紗耶は初めての夜を過ごした。
みんなの前では決して流さなかった涙を
ぼろぼろ流しながら、
胸にすがりつく紗耶が、
愛しくてたまらなかった。

それからも紗耶は、毎日練習に来た。
役がもらえなくても
みんなと一緒に基礎訓練を繰り返しながら、
プロンプターに徹していた。
僕はといえば、創立メンバーという立場から、
お情け程度の役をもらってはいたものの、
組織的にも必要とされているわけではなく、
名前だけの幹部状態に
やる気すらも失いかけていた。

紗耶とはいつしか一緒に暮らすようになっていた。
二人ともお金がなく、
必然的にそうなっただけだったのかも
しれない。
アルバイトと稽古から帰ると、
一緒にご飯を食べ、芝居の話をしながら酒を飲み、
一緒に眠る。それだけの毎日だったけど、
僕は、幸せだった。
あと少しで３０歳に手が届こうかという紗耶が
劇団を辞める決意をするまでは。

「ごめんね」
紗耶が謝ると無性に腹がたった。
紗耶は何も悪くない、わかっているから、

余計に苛立った。
僕はだんだん紗耶をさけるようになり、
今まで一緒に過ごしていた時間に
わざとアルバイトを入れた。
稽古にも出なくなり、
紗耶の送別会にすら、顔を出さなかった。

結局僕は紗耶との関係に
お互いの傷口をなめ合いながら、
坂を転がり下りていくような、
不安と焦りの中にも、
心地よいものを感じていたのだ。
でも紗耶は、
過去を懐かしみ、今を嘆きながら、
目先の小さな夢しか追えなくなっていく人生など、
思い描けなかったのだろう。

紗耶の転身は、
僕の予想どおりふたりの距離を
どんどん広げていった。
僕の知らない人と出会い、
僕の知らない空気を吸い、
僕の知らない夢を追う。
そんな紗耶を僕は妬み、
そんな僕を沙耶は蔑んでいる・・・そんな気がした。

決定的な何かがあったわけでもなく、
紗耶は僕のアパートを出ていった。
「ごめんね」
出ていくその時にも、沙耶は泣き出しそうな顔で、

僕に謝った。
僕は無言でドアを閉めた。
さよならも言わなかった。
言えなかったのかもしれない。

劇団仲間に半ばだまされた形で、
紗耶の舞台を観に来た。
僕は相変わらず怠惰な日常に甘んじている。
舞台の上の沙耶と、目が合った・・気がした。
二人の間の哀しい程の距離を感じた。
とりかえしのつかない失敗にようやく気付いて、
僕は思わず目を伏せた。

約束

「俺、全然大丈夫だからさ」
将太が嘘をついた。
「大丈夫だよ、すぐに元気になるから」
すがりついて泣き叫びたい気持ちをぐっと抑えて、
あたしも笑顔で嘘をついた。
優しいくて哀しい嘘。

消毒の匂いが何もかもを消してしまうような、
無機質な白い病室で、
ぐるぐる巻きの包帯から目だけ出てる将太は、
全然大丈夫なんかじゃなかった。
買ったばかりのスカートを
裏返しにはいている事にすら
まったく気付いてなかったあたしも、
平気でいられるわけがなかった。
あたしたちは、
どんな言葉を登場させればいいのかも
考え付かないほどに動揺して、
ただただお互いの手を握りしめ、
その温かさだけに、
存在を確認しあった。

面会時間の終りを告げに来た看護婦さんに背中を押され、
あたしたちは約束どおり、
涙を見せずに別れた。
そしてその夜、
将太はひとりで逝ってしまった。

バイト先で知り合ったあたしたちは、
ごくごく当たり前の
なんだかんだや、すったもんだを乗り越えて、
お互いにかけがえのない存在になった。
お金がないだの、単位がとれないだの、
ごくごく当たり前の些細な葛藤はあったものの、
今思えば気楽な大学生活を終え、
それぞれに就職をした。

就職先は将太は千葉で、あたしが横浜で、
ごくごくよくあるプチ遠距離恋愛になった。
新人研修の日々が続き、
平日には滅多に会えなかったけど、
週末には疲れた身体引きずって、
あちこち遊びに行った。
若さにまかせた強行スケジュールで、
スキーや格安海外ツアーにも出かけた。

一緒に過ごせる時間が短くなってから、
あたしたちは、ずいぶん沢山の約束をした。
朝起きた時と寝る前には、
必ずメールすること。
待ち合わせには遅刻しないこと。
煙草はすわないこと。
二人でいる時には、時計を見ないこと。
喧嘩したまま別れないこと。
それから・・・絶対に嘘をつかないこと。

そこまであたしが並べた所で将太が言った。
「泣かないこと」
あたしは別れ際に、いつも泣いてしまう。
「あっこの泣き顔が一週間、
目に焼きついて離れないって、どうよ」
あたしは慌てて涙を拭きながら笑顔をつくった。

「将太が営業車で事故を起こしちゃったの」
職場にかかってきた電話は、
二週間ほど前に挨拶に行ったばかりの
将太のお母さんからだった。

会社に何と断ったのか、
どこをどう歩いたたかすら分からないまま、
あたしは病院に辿り着いた。
ふっくらしておおらかそうだった
将太のお母さんは、
憔悴しきって一気に別人のようになっている。

大好きな将太の優しい目が、
包帯の隙間からちょっとだけ覗いている。
「昨日の夜、東北道でね」
まさか、そんなばかな、ありえない、しんじらんない、
そんな単語ばかりが
頭の中をぐるぐると回って、
お母さんの話に無表情で相槌を打つことしかできない。

「中央分離帯にぶつかったって」
お母さんは嗚咽を漏らした。

まさか、そんなばかな、ありえない、しんじらんない。
「居眠りしてたのね・・・」

そうだ・・先週末も疲れた顔をしてた将太を、
あたしがわがまま言って連れまわした。
別れ際にも電車の中で居眠りしていた。
次の日、出張なのだと言っていたのに、
それで将太は運転中に・・
あたしは自分を責めて責めて責めまくった。
「誰も巻き込まなくて、よかったわ」
お母さんの涙声が、いつまでも耳に残った。

将太が往ってしまってからもずっと、
あたしはずっと自分を責め続けた。
何度も将太の後を追おうと思った。
それさえ出来ない自分を蔑み、
生きていることが、
罪だとしか感じられない日々が、
ただただ過ぎていった。

「これであなたも区切りをつけて、
幸せになってちょうだいね」
将太の三回忌によんでくれたお母さんは、
優しい笑顔で私に言った。

帰り道、ふと思い立って、
最後の夏にふたりで行った森のレストランを、
訪ねてみた。
「また一緒に来ようね」
ラズベリーパイを食べながらした

約束を思い出したのだ。

思い出の中と変わらない風景に圧倒されて、
あたしは思わず空を仰いだ。
頭の上を旋回する、二羽の小鳥が視界に入った。
そうか、お前たちはつがいになったんだね。
ずっと我慢していた涙が、今頃こぼれた。

ここにいるの…（前書き）

プチボラーです。

ここにいるの…

突然、物凄い衝撃が全身に走りました。
そしてそのまま私は、
真っ暗な穴の中へ、どんどん吸い込まれていきました。
何かにつかまろうにも、
私の手には感覚がありませんでした。
手どころか、
五感一切の感覚がどこかに
置き去りにされたようでした。

次に気がついた時には、
この場所にいました。
何がどうなったのか思い出すのに、
時間はかかりませんでした。
不意に聴覚を取り戻した私の耳に、
カンカンカンカンという音が、
聞こえてきたからです。
あの時、私が最後に聞いた踏み切りの音です。

あの日、私は出張が一日早く切り上がったので、
あなたを驚かそうと思いつき、
駅前のコーヒーショップで
こっそり待ち伏せをしていました。
そして、
とんでもないものを見てしまったのです。

あなたは知らない女の人と歩いていました。
それだけならまだ、

会社の同僚だろうとか、
大学の後輩だろうとか、
ただの友達に違いないと
自分を納得させることができたのです。
でも、あなたと女の人の間には、
３歳か４歳ぐらいでしょうか、
小さな男の子がいました。
あなたの好きなサッカーチームの帽子をかぶり、
あなたと女の人の手にぶらさがってはしゃいでいました。

私は思わず店を飛び出し、
あなたの後を追いました。
確か妹がいるって聞いたことがある事を思い出しました。
私は必死でした。
きっと妹さんと、その子供なんだ。
そう思い込もうとした時、
男の子があなたを見上げ、
にっこり笑って言ったのです。
「パパ」

カンカンカンカン
私の前で駅前の踏み切りが下りました。
それは足早に渡り終えた3人から、
私の存在を切り離すように思えました。
私はたまらなくなってバーを押し上げました。
そこまでは覚えています。
あの突然の衝撃を受ける前までの事は全部。

その場所で、想いを残したまま死んだ人間の魂は、
そこに留まってしまうと聞いた事があります。

私はどうすればいいのでしょうか。

誰か私に気付いてください。
私の想いを受け止めてください。
そうでなければ私は、
この暗い穴の中へ誰かを・・・・

止まった時間

「あたし・・産みたい」
夕食のレトルトカレーを一口食べてから、
可南子が突然言い出した。
レストランで注文を決めたみたいな、ブティックで洋服を選んだみたいな、
断定的ではあるけれど、ごく自然な口ぶりだったから、
僕は事の重大さに気づくのに、少し時間がかかった。

「それ、まじ？」
口をついて出た言葉は、今思えばかなり無神経だったかもしれない。
でも僕の頭の中は、それくらい混乱していたのだ。
避妊には気をつけていたから、
妊娠するなんて考えた事もなかった。
そういえば結婚を望む女性が、
こっそりコンドームに穴を開けるという話を
聞いた事がある。
さすがに口には出さなかったが、ぼんやりとそんな事まで考えていた。
「亮ちゃんの子だよ」
どうしてわかるんだ？
切り返さなかったのが、精一杯の理性だった。

僕たちは、一緒に暮らすようになって半年が過ぎていた。
僕の毎日は一人暮らしの時とたいして変わらず、
バイトに行って、バンドの練習をして、
バンド仲間と酒を飲んでは夢みたいな夢を語り合って、
夢みたいな夢を持っていることだけで、満足していた。

でも可南子の事は、ごく当たり前に愛していたつもりだったんだ。

その日から、可南子はどんどん行動していった。
病院に行き、妊娠3か月だとわかった。
母子手帳をもらいに行って、楽しそうに何かを書いている。
部屋には赤ちゃんが表紙の雑誌が増えた。
そしてとうとう、可南子の両親がやってきた。

僕はといえば、勝手にハメラレタ気分になっていた。
世間の「出来婚」は、こうやって進んでいくわけだ。
結婚という文字は、僕の辞書にはなかった。
僕にとって愛の終着駅はやっぱり愛で、
せいぜい依存とか共存とか共生ってレベルの
共同生活があるだけで、
責任を背負う覚悟なんてこれっぽっちも持ち合わせていなかったのだ。

可南子の両親は、そろって教師という
僕にとっては敵対すべき人種で、
放課後、職員室によばれた時のような居心地の悪さの中、
その口から出る言葉は、全部説教にしか聞こえなかった。
僕はもう、どうにもいたたまれずに、
気づいたら、逃げだしていた。

それっきり僕は、家に戻らなかった。
友達に合鍵を渡し、荷物をとってきてもらって、
そいつの家に居候を決め込んだ。
可南子と鉢合わせした友達から、
可南子がずっと泣いていたと聞いても、
どうしようもなかった。

携帯電話も変え、アパートのある町を
通ることすらしなくなった。
時間が過ぎるのを待つしかない。
時間さえ過ぎれば、すべて上手くいくのだと、
今までの事は、何もかもなかったことになるのだと、
俺は本気でそう思っていた。
夢みたいな夢しか見られない僕が、
父親になるなんて到底無理な話なのだ。
いつしか僕は記憶の中から、
可南子という存在をすっぱり消し去った…気になっていた。

それから1年が過ぎたらしい最近、気づいたことがある。
僕の時間が、止まってしまったという事だ。
夢みたいな夢すら見られなくなり、
バンドもバイトも辞めてしまった。
友達には彼女が出来、部屋を追い出された。
親に頭を下げて実家に帰るか、ホームレスになるしかないのか、
ぼんやりと考えていたら、
あのアパートに着いていた。
２０１号室を見上げると、明かりがついている。
可南子？
どこかから赤ん坊の声が聞こえた。
可南子が子どもを産んで、ずっと僕を待っていた？
それがどれだけ身勝手な想像なのかなど、
この時の僕にはまだ、気付くはずもなかった。

階段を駆け上がり、懐かしいドアの前に立った。
僕のまわりの時間はあっという間にあの頃に戻り、
いつ帰ってくるのかもわからない僕を
文句ひとつ言わずに待っていた可南子の

笑顔が現れた。
いつもきれいに片づけられていた、
明るくて温かい部屋と、美味しい料理。
それを僕は「幸せごっこ」と呼んで、
うっとおしく思い、
仲間との酒を飲むたびに愚痴っていたことなどは、
すっかり忘れ去っていた。

可南子と子どもを思いっきり抱きしめよう。
心から謝れば、きっと許してくれるさ。
ドアチャイムに手を伸ばしたところで、
ドアが開いた。
「可南子？」

見知らぬ派手な女の顔が、訝しげに僕を見た。
「何か？」
奥から男の声が聞こえる。
「誰？」
「あの・・・石田さんは？」
僕の声は震えていたのだと思う。
「は？」
女は部屋の奥の男に目をやった。
「あんだ？てめえ」
パンツ一枚の男が出てきた。
上半身にはキレイに刺青が入っている。
「す、すみません、間違えました」
僕は慌てて階段を駆け下りようとして、
足を滑らせ、下まで転がり落ちた。
酷い痛みが全身をかけめぐった。
僕が可南子に与えた痛みは、どれほどのものだったのか。

じんじんと神経を駆け巡る痛みに
耐えながら、僕の時間がようやく少しだけ動き出した。

天気雨

あの時、あの場所で、
バッタリ出会ってしまったのは、
本当に偶然だった。

今思えば何食わぬ顔で
通り過ぎればよかったのに、
ふたりは同時に足を止めてしまった。
私はテニスをした帰り道で、
女の子の連れがいた。
見た目からして、随分と年の離れた彼との関係を
彼女にどう説明したのか、
よく思い出せない。
きっと訝しげな表情を浮かべながら
帰って行ったであろう彼女の、
後姿だけはよく覚えている。

「外で会うのって、初めてかな」
彼女の後姿が豆つぶのようになってから、
ようやく彼が口を開いた。
ちょっとはにかんだような
笑みを浮かべている。
「こんなに明るい時間に会うのも初めてだね」
私もぎこちなく頬をひきつらせた。

私たちはいつも夜が来てから、
狭くて薄暗い部屋の中で会う。
私が見る時にはもう、

上着はクロークに預けられ、
ネクタイは緩められている。
そして私はそのネクタイを、
ゆっくりと外していく。

それがどんなネクタイだったかなんて、
記憶している余裕はない。
私には限られた時間の中で、
しなくてはならない事がたくさんあるから。
彼は私の大事なお客さんだから。

ネクタイをきちんと締めて、
会社のロゴが入った袋を抱えた彼は、
別人のようでもあり、
やっぱり彼そのものだとも感じた。
何より「みかちゃん」と呼ぶ、
少しくぐもった声が
すべてをフラッシュバックさせてくれた。

空はピーカンに晴れてひどく暑かったのに、
突然、雨が降り出した。
どの雲が降らせているのか悩むくらい、
空はそのまま青かった。
あなたは慌ててスーツの上着を脱いで
会社の紙袋にかぶせる。
あっという間に私たちは、
ずぶ濡れになっていた。
私のアパートは、
そこから歩いて１０分ほどのところにあった。
不思議と迷ったり困ったりはしなかった。

私の部屋に彼がいる。
それはきっと神様がくれた風景だ。
「悪いね」
彼は、恐縮しながら私のタオルで頭を拭き、
私は、彼の濡れたシャツに一心不乱にアイロンをかける。
ただそれだけなのに、
胸ははじけそうに高鳴っている。
彼は時々時計に目をやりながら、
私の指先を自然に追っていた。
彼の視線が指先から外れ、
私の身体に滑り始めた。

その時は確かに、店の女の子とお客じゃなかった。
私は彼の腕の中で、
ただの「女」になっていた。

それから彼は、
二度とお店には来なかった。
突然の別れは、あの天気雨のせいだ。
寂しくて哀しくて、毎日めそめそ泣いていた。

彼なりのけじめなのだろうと、
１０年たってから、ようやくそう思えた。
私もすべての過去に蓋をして、
明日、お嫁に行く。

絵日記

「きょう、ママとおねえちゃんと、ゆうえんちにいきました。
パパは、いっしょにいくって、やくそくしたのに、ゆびきりしたのに、
おしごとにいってしまいました。
かんらんしゃのなかで、ママがないていました。」

弟の佑樹が書いた絵日記が、破り捨てられていた。
夏休みの宿題なのだと言って、一所懸命に書いていたものだ。
観覧車の絵の下に、たどたどしい文字が並んでいるのを見て涙が出た。
いたずらばかりするし、すぐに殴ってくるし、
口も達者で憎たらしい事ばかり言うけど、
まだ小学二年生だ。
お父さんが帰ってこない理由は、
きっとよく分かっていないのだと思う。
それでも小さな胸を痛め、幼い頭で考えて、
この日記は学校には出せないと思ったのだろう。
その胸の内を考えるとまた涙が出た。
あたし自身、だいぶナーバスになっているんだと思う。

佑樹がスクールバスでスイミングスクールに出かけた後、
あたしはお母さんに呼ばれた。
「美香はもう中学生だからね」
お母さんはそう切り出した。
予想はついている。
その場から逃げ出したい衝動を、あたしはぐっと抑えた。

夏休みに入る少し前、
お父さんが仕事に出ている昼間に知らない女の人が来た。
白い帽子の似合う細くて綺麗な人だった。
お母さんは普段着のままで、その人とどこかへ出かけた。
すっかり日も暮れてから戻ってきた時には、
目は真っ赤で口もきけないほど、疲れきっていた。
あたしは佑樹と二人でカップラーメンを食べて、
子ども部屋に入った。
いつもはうるさい佑樹がやけに神妙な顔をして、
あたしの傍で大人しくしていた。

「ごめんね」
ここ一ヶ月ですっかり老け込んだ気がするお母さんは、
何度も繰り返した。
お母さんのせいじゃないのは分かってる。
一番辛いのはお母さんだってこともわかってる。
それでもあたしは、転校するのは嫌だなあとか、
苗字変わるのは嫌だなあとか、
自分の事ばかり考えていた。

お父さんの事は、ずっと大好きだった。
小さい頃から休みの度にいろんな所に連れて行ってくれたし、
家では将棋を教えてくれたり、勉強をみてくれたりもした。
初潮が来てからは一緒にお風呂にこそ入らなくなったけど、
友達が言うみたいに、不潔とか汚いとかって思ったことはない。
背が高くてお洒落で何でも知ってて、
本当に尊敬していた。
お母さんはどっちかというと古風な人で、
女は一歩下がって夫についていくというような
考えを持っているタイプだ。

自分の身のまわりはあまりかまわず、
夫のため、子どものため、家族のためが第一で、
趣味といえばガーデニングとお菓子作りぐらいという、
絵にかいたような専業主婦だ。
あたしはお母さんみたいな生き方は出来ないなとは思いつつ、
やっぱり尊敬していた。
子どもはみんなそうだと思うけど、
うちの家族は仲良しで、一番すてきな家族だって、
心からそう思っていたのだ。

夏休みが終わる頃には、正式に三人家族になる事になった。
佑樹にはまだ話していないが、彼なりに何かしら察しているのだろう。
今日も佑樹は真っ白な絵日記を前に頭を抱えている。
「本当のこと、書けばいいじゃん」
あたしは佑樹の頭を撫ぜた。
どうしようもないことっていっぱいあるんだなあと思う。
あたしは早く大人になりたい。
すべての事が自分で解決できるようになって、
佑樹を守ってあげたい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5424d/

恋哀～　ren-ai　～物語

2010年10月20日17時41分発行